

【論文】

東亜同文書院二代目院長・杉浦重剛の清国および 上海東亜同文書院への訪問について ——「塾主渡清日誌」をベースにして——

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター・元センター長 藤田 佳久

1. はじめに

本稿は、戦前の上海に存在していた東亜同文書院の二代目院長に就任した杉浦重剛による当時の清国と東亜同文書院への訪問についてその実際についてを明らかにするところに目的がある。

というのは、杉浦重剛は東亜同文書院（以下、書院と称す）における院長としての任期が創設時の根津一院長が就任した1年間の任期の後を継いだわずか1年間だけで辞任したこと、しかも健康上の問題などもあり、院長に就任したとはいえ、上海の東亜同文書院へは出向いてはいなかったのではないかと、という風評が流布していたように思われるからである。それはまた杉浦重剛が極めて個性的な人物であったにもかかわらず、書院や清国との関係の中で、他の個性的な院長に比べ、その書院誕生直後という状況下での任期の短さもあって、その存在感が強調されていなかったという側面もあったためかもしれない。

2. 杉浦重剛に対する書院院長への就任要請

では、まず杉浦重剛への書院院長就任はどのように行われたかについてみてみる。

直接的には明治34年（1901）の大晦日の午後、佐々木高美大人が杉浦重剛の自宅を訪ね、東亜同文会会長の近衛篤磨公から頼まれた案件で、「東京同文書院及び東亜同文書院の院長になってはくれまいか」¹との依頼であった。そのより直接の理由は、この両院についてはこれまで根津一がその任に当たっていたが、この度、根津は新たに近衛公が力を入れる東亜同文会の幹事長に就任することになったため、そのあとを引き受けてもらいたいという提案であった。そしてこの考えは近衛公だけの考えでなく、杉浦宅へ訪問してきた自分（佐々木高美）も全く同じ考えだと表明したという²。その時点で杉浦重剛は国学院や日本中学校の校長の任にも当たっていたが、それについては佐々木高美が引き受けると説得した。

それを受け、『杉浦重剛』（伝）³によれば、「自分も本来、支那方面のことは、少しく働いてみたいと思っていたのであるから、十分心はあるけれども即答もなりかねるから、1週間ほど松の内の済むまでくらい待っていただきたいと答えた」という⁴。

ところで近衛公にたのまれて杉浦重剛宅を訪れた佐々木高美は、文政13年（1830）の土佐生まれ。土佐藩士を経て明治政府へ出

仕することになり、明治維新直後の混乱期の司法を担当、欧米の司法制度調査も行った。帰国後天皇の側近となり、天皇親政を主張、派閥に翻弄された後、挫折し、工部局に入り、官営工場の民間払い下げや鉄道施設のインフラ整備に力を入れるが、ふたたび派閥に翻弄され工部局は廃止され、宮中顧問官となり、政局から切り離された。

明治17年(1884)には伯爵となっている。当初、佐々木は近衛公との面識はなかったが、明治32年(1899)秋季皇霊祭のさい、陸実が、近年近衛公の活躍奔走が著しいが、適当な参謀がないかという問いに、杉浦重剛はすぐに佐々木高美を推薦したという⁵。皇室関係の実績もあったからであろう。そこで近衛公に佐々木との出会いが設定された。

具体的には、日清戦争の終結過程でドイツ、イギリス、ロシアは漁夫の利を狙い、各拠点を占領し、とくにロシアは遼東半島に進出占領し、シベリア鉄道の延長を図るなど、日本にとってこの一帯の不安定要因が増大する状況が生まれた。そのような状況下で小村寿太郎の対清国での積極的な活動が目立ち、明治33年(1900)にこの小村寿太郎が帰国し、再び、清国へ出発する直前に、華族会館で近衛らのグループに時局の真相と今後の対清対露方針を語る会が持たれた。

その時、小村寿太郎は、外交当局の対応は一時的な対処療法に過ぎないこと、より根本的な対応は教育者にゆだねざるを得ないこと、しかし、日本国民の国際感覚ははなはだ低く、せつかくの対外対応も国民と歩調を合わせられないことを指摘し論じた。そして、その場の全員は小村の卓見と誠意に

感服したという⁶。

折しも特に近衛は、すでに東京同文書院を開設し、東亜同文会の設立(1898)も進めており、さらにこの後すぐの東亜同文書院の開学(1901)計画は、この小村寿太郎の主張する国民の対外国際思想の涵養の必要性に強く裏付けられるとして、わが道に自信を持ったのであろう。

それはこの後の近衛がとった人事政策からもわかる。すなわち、このあと開学した東亜同文書院の院長に任命した根津一を、その実践力を発揮できることから、その1年後には東亜同文会の中枢である幹事長役に着任させ、残る教育部門である東京同文書院と東亜同文書院の二つの学校の校長には近衛にとって新たな人材である一大教育学者でもあった杉浦重剛を抜擢したからである。国民教育の涵養を主張した小村寿太郎の提案をすぐに生かした近衛の柔軟な行動力がうかがわれる。

問題は近衛篤磨と杉浦重剛の接点である。それが前述の小村寿太郎の時局講演会であり、その出席者のメンバーには近衛とともに、近衛の参謀候補として杉浦重剛が推した佐々木高美が初めて出席し、佐藤正(当初の東亜同文会幹事長候補)、そして杉浦重剛の面々が揃い、いわば近衛内閣が佐々木の参加で布陣を強めたという形になった。この企画は陸實によるものであったろう。この布陣の中で杉浦重剛は佐々木の支持も受け、その意を強くした近衛が小村の指摘した教育による国際感覚の涵養役として、イギリス留学の経験もある杉浦重剛が東京同文書院と東亜同文書院の両方の院長役に選ばれたといえる。

前述した佐々木の支持を受けたことは、

近衛の新しい参謀役となった佐々木が、明治34年(1901)杉浦の自宅を訪ねて両院長の就任依頼を近衛公から依頼されたと伝え、さらに翌年正月明けにも再度佐々木が依頼に尋ねていることからもうかがえる。そして、その翌日には近衛公も自ら杉浦の自宅を訪ね、要請している。

こうした要請の中で、杉浦は引き受けることを決意し、同年1月7日、城南荘を訪ね、近衛公と佐々木高美の前で、書院院長の引き受けを承諾している。その時の条件として、杉浦が校長をやっていた日本中学校⁷など内地のことはお二人にお願いしたいと伝えている。後述するように、杉浦には主催する私塾もあり、多くの塾生もいて、この決意は大変であったことがわかる。

また、杉浦は当時、身体が虚弱であり、支那の地で寿命が尽きる恐れもあると伝えている。それについて依頼した二人は、寿命についてはわかるものではないと力づけている。この点について、のちに杉浦は「男盛りともいふべき両君が(自分よりも早く)亡き人になって、かえって自分のごとき弱い体でなお60年の意気を存している。思えば実に感慨にたえざる次第である」と伝えたという⁸。

いずれにせよ、杉浦の書院院長への登用は、近衛が佐々木高美と知り合った中で、佐々木の強い推薦と近衛公の決断によって決定されたといえる。

3. 杉浦重剛の人物史

ではこのように近衛公と佐々木に書院の院長として見込まれた杉浦重剛とはどのような人物だったのか。

ひとこと言えば、杉浦重剛は戦前の日

本においては、明治から大正期にかけて活躍した優れた官僚であり、教育者であった。その思想的根源には純粋な皇室中心主義があったが、20歳代にはイギリスに留学して、ヨーロッパの歴史文化そして教育史にも関心を持ち、また学んだ学問は農学から転換した化学で、自然科学者でもあった。当時としては国際的感覚も持ったまさに優れて異色の人材であったと言える。そしてそれらの成果を私塾に生かし、学校教育にも生かす啓蒙的で実践的な活動を教育の根本にも据え、教育官僚として教育改革にも貢献するなど、当時の教育界におけるその存在感は絶大なものがあったといえる。そこで、以下その人物像を簡単に素描してみる⁹。

杉浦は安政2年(1855)、近江国膳所藩の儒者杉浦重文の子として生まれた。現在の滋賀県大津市杉浦町である。本格的な幼児教育は5歳から始まり、藩校への入学、詩づくり、10歳には漢学、11歳にはさらに蘭学をも学び、その実績が評価され、14歳には藩校の句読方と蘭学の世話人、さらに漢学塾舎長に就任(明治2年)、そして翌年には15歳で藩の貢進生に推薦され上京し、大学南校に入学し、英学普通科に学んでいる。

21歳になると、英国への留学を命じられ、当初農学校で学ぶが、牧畜と雑穀農業は日本で活用できないと判断し、専攻を変え、23歳でロンドンの南ケンジントン化学校に入り、翌年には同市のユニバーシティカレッジで物理学と数学を学んでいる。これらの成果は後に当時の最新化学とその原理などを紹介する『理化学』や翻訳の『有機化学沿革史』などの大作をもたらした¹⁰。

しかし、明治13年の25歳の時、体調をくずし、帰国。その年末には留学実績から東

京大学理学部博物場掛取締に採用され、翌年には文部省の御用掛となり、翌年には結婚。また有志と「東洋学芸雑誌」を発刊。翌年(明治15年)には東京大学予備門長となつて、同大にかかわりつつ活動のベースが出来上がり、のちに発展することになる私塾の称好塾を創設(明治16年)している。

しかし、東京大学予備門をめぐる紛争が生じ、意見を異にしたことから辞任(明治18年)。それに伴い学校教育や学校経営の方向へシフトを変えている。

すなわち、小学読本の編集や東京英語学校の設立(のちの日本中学校)の設立(明治18年)、楽水学校の設立(同19年)で¹¹、日本教育界にも力をいれるようになっていく。そしてその啓蒙活動を目指し、井上満了や志賀重昂など10氏とともに雑誌「日本人」を発刊(明治21年)。さらに翌年には日本新聞社の立ち上げにも尽力している。

その一方、それより前の明治20年、小村寿太郎などの同志たちと井上薫の条約改正案に反対したことが契機になって、政界へも進出し、同22年には大熊重信が引き継いだ条約改正案に反対し、その同志らと「日本倶楽部」を結成、仙台で遊説もしている。そして文部省参事官ほかの官僚の役職を辞任すると、明治23年、滋賀県で衆議院議員に立候補し、当選。併せて東京の小石川区の区会議員にも当選している。しかし、衆議院議員は立候補したときの公約が実現できないということで、翌年には辞職している。政治の世界の不合理性に気づいたということであろう。

そのあと東京へ籍を移すと、東京市や区の学務委員を引き受け、教育の世界をサポートし、当時私立学校がしだいに増える中

で出てきた「私立学校撲滅策」に反対し、2年後の明治26年、その反対を実現し、日本中学校を自ら運営する立場からも自由な立場の学校経営を擁護している。

以上のような杉浦重剛の活躍は、20歳代でイギリス留学を踏まえた経験の上での30歳代の発展であったといえる。それはさらに40歳代になつても継続し、国学院の学監や高等教育会議議員、皇典講究幹事長などへの就任、日本中学校の火災と修復、読売や朝日新聞の論説寄稿、父親の死と子供たちの結婚、増えた家族と私塾の称好塾での塾生との家族的なつながり、塾希望の来訪者の増加と多忙となり、明治32年(1899、44歳)には軽い神経衰弱を経験している。

そしてその3年後の明治35年(1902、47歳)、杉浦重剛は前述したように近衛公と佐々木高美から東亜同文書院と東京同文書院両行の院長就任を要請され、1月、それを引き受けたのである。以上の経歴からみると、近衛公や佐々木からすれば十分すぎるほどの人材であったに違いない。また杉浦からすれば、同じく十分納得できる人事だったに違いない。

4. 杉浦重剛の清国、上海、東亜同文書院訪問

(1) 国内・長崎までのコースと称好塾

① 絆の送別会

こうして杉浦重剛は東亜同文書院へ院長として清国へ旅立つことになった。そのコースの期間は明治34年(1902)、4月5日新橋発、5月23日新橋着の45日間の全行程で、そのうち清国には4月16日上海着から、5月17日上海発までのほぼ1か月間の滞在であった。

出発に先立ち、3月23、24日ごろ送別会が開かれ、近衛公、佐々木高美、小村寿太郎、西村貞、前田元年、三宅雄次郎、陸実、熊田宜遜、宮崎道正、加藤敬介の10人と杉浦重剛の全部で11人が集まった¹²。おりから小村寿太郎が男爵になったお祝いも兼ねており、ここで近衛公、佐々木、小村、杉浦の4人の間に強い絆が結ばれていたことがうかがわれる。参加者のうち宮崎と加藤が発起人であった。

なお、杉浦重剛の出版を手掛けてきた熊田活版所関係スタッフも顔をそろえた。おそらくは杉浦重剛の意向を汲んだ大げさにはならない内輪の送別会であったと思われる。

② 新橋を出発

こうして同年4月5日(土)、新橋駅から全45日の清国・東亜同文書院への訪問の旅が始まった。

図1は、そのうち日本国内のまず長崎までの行程図を示したものである。駅や場所ごとの黒丸とその大きさは訪問地での来訪

者や途上の駅での来訪者、駆け付けた見送り人の数を示したものである。黒丸が大きいほど、訪問地での出迎え者や来訪者が多かったことを示している。それをみると、東京や滋賀、京都、大阪、神戸、門司そして長崎に出迎え者や来訪者が多く集中しており、とくに陸路の鉄道沿いに多い。神戸から長崎は海路の船のため寄港地だけになっている。いずれにせよ、この旅は清国へ上陸する前の日本国内での各地で、多くの出迎え者や送別者が杉浦重剛を取り囲むほどの大人気であったことがわかる。天皇やよほどの人物でないとなこのような人気は考えられず、杉浦重剛はそれほどまでの国民的人気があったことを確認することができる。

③ 称好塾

しかし、この黒丸の大きさの多くは、杉浦重剛が主催する私塾「称好塾」の塾生(「塾友」という)たちやその関係者であった。

この杉浦重剛の私塾は、前述したように明治16年(1883)に開設された。その前年に東京大学予備門長に就任し、イギリス留

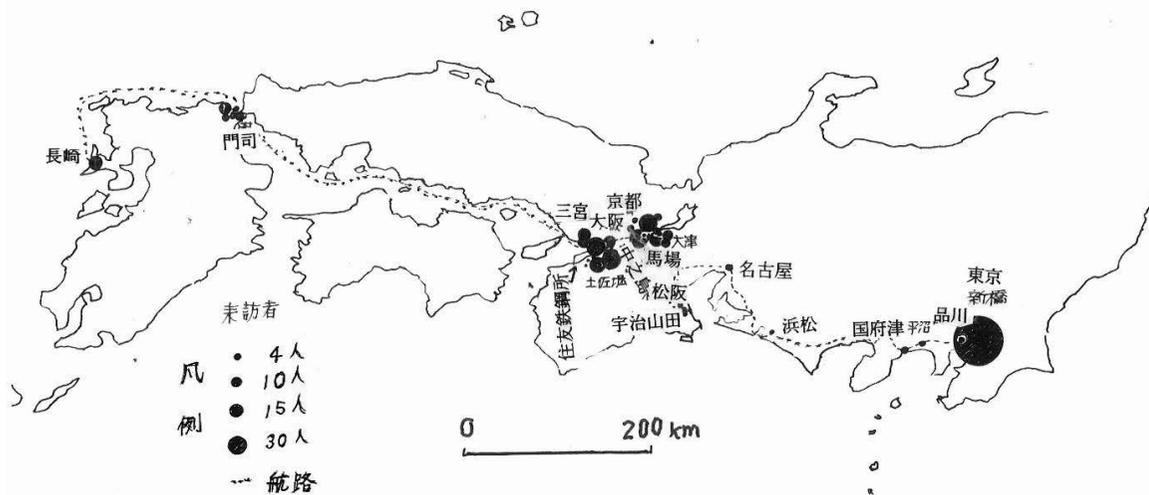


図1 杉浦重剛の訪清国コース(日本国内)と訪問地別見送り来訪者数の分布(日記より作成)

学後の日本の教育にかかわるようになり、明治 18 年には小学読本の編纂、私立の東京英語学校(のちの日本中学校などの)を設立するなど、教育に強く関心を持ち、教育者にもなっていた。明治 20 年代には『教育原論沿革史』¹³や『教育全史』¹⁴などの欧米の原著を翻訳し、世界の教育史を紹介する大著の力作を刊行している。そのエネルギーの根源には、折から日本国内で強まった欧化思想に対する日本主義の評価を進める必要性という杉浦の主張があった。イギリス経験をふまえた国際感覚がそのベースにある主張であり、説得力があったといえる。それだけにこうした杉浦重剛の教えを乞う知識階級の青年が少しずつ集まるようになり、杉浦重剛の単なる学校教育だけに留まらず、いわば日本文化の伝統をベースにした人間教育の教えにも共感し、その教えを乞う中で誕生した私塾称好塾は、そのほとぼしりであったといえる。杉浦重剛は東京小石川に購入した邸宅もその一部に利用した。学校から帰塾した塾生たちへの杉浦重剛の人格が作り出す親子のような親密さと塾生たちの自発的な生活態度の育成の評価は広まり、親の信頼を得た入塾希望者は静かに増えた。明治 25 年には 40 名ほどであった塾生は、その 10 年後にも 130 名程度であった¹⁵が、こののちの大正 7 年(1918)頃には入塾者の数は 500 人を推移するほどになり¹⁶、塾生である「塾友」たちは強いつながりを持ちつつ各地に広がった。

④ 塾生たちの見送り、同乗、下車記録と記録者

前掲の図 1 は、このような「塾友」たちが、各地で塾主である杉浦重剛を迎えた足跡である。

たとえば、まず出発地の東京・新橋駅では朝 6 時 20 分発にもかかわらず、見送り客で駅は大変混雑したという。多くの称好塾の「塾友」たちが見送りに集合したからである。この新橋駅では原元蔵と杉浦五郎の 2 人が杉浦重剛と同乗し、塾長杉浦重剛の世話とお別れを惜しんだ。次の品川駅では塾友の川瀬春太郎が 1 人同乗し、平沼駅では同じく塾友の木内新と鈴木重義の 2 人が乗り込んだ。そこではかならずしも体調が万全でなく、塾主の杉浦重剛も自ら心配していた旅の無事を祈る気持ちも大きかったのであろう。国府津では中津川一司と今井次郎、河野治平の 3 人が乗り込み、次々と同乗者は増え、杉浦重剛塾長をサポートし、世話をしている。そして次の沼津駅では、新橋から同乗していた原と杉浦の塾友が下車しており、バトンタッチをする形も取りつつ、浜松では末久善十郎の 1 人が、名古屋では平石氏人、加藤縫三郎の 2 人の見送りだけの形も見られた。名古屋では山崎信樹が 1 人同乗したが、この山崎は関西線弥富駅で下車している。全体としては、同乗者は塾長・杉浦重剛が神戸港から出港するときの見送りまで見届けている。そこには塾友たちの塾主・杉浦重剛への熱い思いがあふれ出ている。

このようにこの塾主・杉浦重剛の清国への旅については、同乗者や見送り人まで塾友の名前が逐一記録されていて、さらに清国内はもとより、帰国時も長崎以降出発地の新橋駅へ戻るまでの旅行期間中が詳細に記録されている。しかし、この記録は杉浦重剛自身の手になるものではない。杉浦重剛は旅行中、当然疲労がたまり、毎日記録をとることは困難であった。

そこでこの詳細な記録は塾友たちのパトタッチでそれぞれの担当者によって行われた。いわば塾友間で決めた記録係が組織されたわけで、称好塾の機動制がうかがわれる。結果として第3者によるより客観的な旅行日誌が記録されることになったわけである。ちなみに、新橋から神戸までは塾友北村三郎が担当し、そのあとは同じく塾友の岩田清三郎が担当した¹⁷。

⑤ 伊勢から膳所、京都、大阪

ところで、その後、旅は亀山から参宮線に入り、伊勢神宮の参拝へ向かった。

宇治山田駅には2人、宿舎の旅館には3人が来訪し、同宿する塾生もいた。その夜23時から晩さん会が開かれたが、新橋以来の長旅で、塾主・杉浦重剛（以下、塾主という）は疲労の様子で、日誌には「察するに余りある」¹⁸とある。塾友が塾主を慕って次々と挨拶や同乗者となり、それに相手をする時間が多く、さすがに疲れたのであろう。

翌日は伊勢内宮と神楽殿の参拝で、昨夜来訪し、同宿した和田塾友が案内した。昼食の後、外宮の御正殿のみ参拝し、昼すぎに出発し、松阪、柘植、瀬田、膳所を経て19時馬場へ到着。塾主の隣国への旅とはいえ、2度戻れないかもしれない故郷との別れの挨拶を心した日程であったと思われる。

少休憩した中村屋には10人が出迎え、うち4人が塾友、あとは旧知の懐かしい面々。偶此駅に2人出迎えがあった後、大津の塾友の萩家に投宿。そこへ3人の塾友と朝日新聞の記者も来訪し、塾主は少し寛げたようであったと記している。

翌4月7日は朝早くも12人の塾友が来訪。うち7人は恩師の墓参。先祖や謹慎の

墓も清掃し、さらに塾主の旧宅主（蕉亭）を訪れ、塾主は感涙。そのあと、塾友の母親と弟が挨拶に来訪。塾友とは家族ぐるみのお付き合いが知られる。もう1人の塾友も一緒に殉難諸士の墓参。さらに塾主が幼時に校庭に植えたムベの樹がある滋賀県第二中学校を訪れた後、親戚の墓参。そして快風楼で祝宴。22人の塾友が参集した。杉浦重剛としてはここで思いっきり故郷にあいさつをすませたということだろう。

午後3時、多くの見送りを受けて京都へ向かった。塾友31人が次々と参集し、東山の平野屋で宴が開かれた。ここで塾主は、清国への旅立ちの経緯を語り、次いで清国での教育について語っている。

それによると次の通り。

「支那人を教育するは、教育その物の困難なりというのみならず、また実に外交上の事柄に関するものなきにあらず。難中の難なる所以なり。然れども何人かがこの困難を引き受けざるを得ず。今や退任を辞せずして、局にあたるを諾したる以上は、心蜜に決するところあり。微力の及ぶ限り、日清兩國のために尽くす所あらん、」¹⁹。

この夜、塾友の森宅で塾友たちと団欒し、塾主はそのあと大いに負けぬ気主義を鼓舞したという。清国・東亜同文書院の院長として着任する決意を吐露したということであろう。

翌4月8日は午前中、京都の北野の一带をめぐり、北野の宮司の塾友をはじめ多くの塾生たちの挨拶を受けている。聖護院での昼食の後、駆け付けた塾生の母親に会っ

た後、京都帝国大学を参観し、旧知に会い、理工科の諸教室や寄宿舎も参観している。称好塾の参考にしたかったのであろう。そののちまた塾友の親戚宅を訪問している。そのあと円山公園での神職たちの宴会に呼ばれ、演説をし、その留守中に、7人の塾友が来訪している。19時に大阪へ向けて京都駅を発車するときには、10人の塾友だけでなく、20人ほどの多くの学生たちが見送りに来ていた。京都には多くの塾友がおり、その影響や、また、塾主の知名度もあって、そのような盛大な見送りになったのであろう。その夜は大阪の土佐堀の宿にはいった。さっそく13人の塾友が来訪している。

翌9日は、早々と塾友25人が来訪し、この日は校長をしていた「日本中学校」の卒業式でもあったため、「前途なお遠し、互いに努めん」という祝電を打っている。これから清国に出向く塾長の心境と決意を表明したようにも思われる。そしてこの頃から各地で開設されてゆく「商品陳列所」の大阪版を見学している。書院の設立趣意である清国との貿易実務との関係でぜひ見学すべき対象であったと思われる。この夜は大阪での塾友たちとの宴会があり、塾主は19人の塾友を前にして、京都での宴会席上と同じ話をしている。この後、塾生も6人駆け付けている。

翌10日も大阪滞在である。当時の伝法村に開業していたこの業界では日本初の住友鑄鋼所を見学している。塾友の説明を受け、この日誌の記録者だけでなく、同行した塾友たちも大いに満足したという。これは後に清国・漢口近くの大冶鉄山の見学が予定されており、参考にすべき対象であったと思われる。この夜は、中之島の自由亭で河上

先生の招待で、平賀先生もまた参加され晩餐会が開かれ、塾友など29人の来訪者があった。この日は塾主の旧暦の誕生日でもあった。

翌11日も朝から16人の来訪者があり、塾友宅で昼食の後、梅田駅へ向かった。13時出発時には在阪中に来訪した塾友などが見送った。うち4人が同乗している。14時には三宮駅着。千頭先生は前日から待機し、塾友16人が出迎えた。海岸近くの塾友宅に投宿。塾主は連日の訪問で少し疲れ気味となったが、郵船会社の塾友が便宜を図ってくれたりしている。

⑥ 神戸出航、門司、長崎へ

4月12日、いよいよ神戸港から瀬戸内海へ出航の日となった。朝から10人余りの見送り来訪者が駆け付け、塾主は大忙し。10時、神戸港を出港。記録者北村和三郎は無事を祈ると記した。そしてここから以下の日誌記録者は、岩田清三郎に交代した。そしてこの時点からの正式の随行員は、記録者の岩田のほか中島端と石渡幸之輔の3人となった。

出航後も船中の見送り人は18人を数え、大阪、京都、大津からの塾友の見送り人もいた。外は寒気もあり、塾主は船内で塾友の小田切総領事および在阪清国領事の黄以霖氏と時々会談をした。

翌13日、門司港着。遠く芦屋、また小竹から塾友が見送りに来訪。11時出航。好天となり、玄界灘も穏やか。塾主も詩を詠んでいる。朝方、郵船会社馬関支社の塾友からイギリスがオレンジ公国に勝利したという情報があり、下関のイギリス船上が満艦飾であったのを見ている。そして午後11時長崎

港着。船内泊。

14日、7時半に早くも出迎えに塾友が来船。一緒に上陸し、車で塾友が塾主の疲労を勘案して予約していた宝屋に向かい休憩。各塾友に塾主到着の連絡がひろがり、造船所、郵便電信局、県庁、師範学校、東洋日出新聞、大阪毎日新聞支部などから20人ほどの塾友が駆け付け、同所で午餐会を開催。大冶鉦山から帰朝したばかりの塾友も来訪した。このように塾友たちは長崎でも地域のリーダーとして活躍している様子がわかり、称好塾の特性がうかがわれる。

こうして午後4時、いよいよ長崎から出航し、清国へ向かうことになった。

すると、たちまち塾友である外務省書記官の日置益、大倉官房長の長森吉郎、清国留学生監督の督銭恂らが面会に来ている。

4月15日は船上。

5. 清国・上海と東亜同文書院をめぐるコース

① 上海着、東亜同文書院へ

4月16日(水)、午前8時上海埠頭着。ついに清国入りした。

早速、東亜同文書院からは事務員の中村兼善と山田(純三郎だろう)の2人、駐屯隊副官の高塚疆、滬報社員の井出三郎が出迎えに来て、東亜同文書院へ向かった。

当時の東亜同文書院は、開設2年目、上海埠頭から旧上海の町を過ぎた南方、沼沢地の一角の高昌廟の建物を借りて桂墅里校舎として開設されていた。この時、杉浦重剛一行が黄浦江をさかのぼったのか、陸路を南下して到着したのかについては記されていない。

はじめての書院では、教頭兼監督の菊池

謙次郎が昨夜以来扁桃腺炎にかかり、寝込んでおり、塾主はその病床を見舞った。そして到着電報で約束していた小宮山桂介塾友に次の和歌とも送っている。「こよみなき里にも春は知られけり 何処の峰も花の白雲」²⁰。異国上海の地にも春がきていたという安心感であろうか。

午後1時には、さっそく書院学生一同に、「今回、臀の重かった予(杉浦)が進んでこの任につくのを決心したのは、偶然のことではない。」²¹というような主旨で新任の挨拶をしたと記録されている。そしてそのあと、書院全体を巡視し、夜は校内で開かれた英語会に出席している。英語の得意なこの新院長は書院学生たちの英語力に関心を持ったということであろうか。

書院滞在2日目の4月17日(木)は、朝、中島塾生(か)と事務会計の中村兼善の2人を連れて、校舎の貸主である経元善を訪問している。彼はもともとここで女学校を開設していたとされる。その印象を記録者は「常に好意を寄せられる人」²²だとしている。

さらに午前中から午後3時にかけて、事務員の中村、石渡塾友を随行し、同文滬報館、商船会社支店、三井物産支店、正金銀行支店、領事館、郵船会社支店、大東汽船会社、郵便局、順泰洋行(吉田塾友の石炭商)など上海の主な日本の商社や銀行、政府機関などを順次訪問挨拶して回っている。設立されたばかりではあるが、東亜同文書院の2代目院長としての存在を披露したといえる。また、帰院後も書院の沈文藻講師が来訪し談じ、多忙であった。

翌18日の午前中は東亜同文書院の授業を参観したが、その詳細は記録されていない。そして午後は守備軍艦赤城と駐屯隊を

訪問。途中、文廷式の訪問も受け、「日本人はついに西洋人に追いついたか」の発言に、院長は「その力はなにによるのだろうか」と答えたという²³。午後7時から正金銀行からの招待会に中村事務員と出席。そのほか、滬報の井手三郎、弟の井手友喜、書院教師の鐸麟と鋭申二の訪問を受けている。これら書院の清国人教師の名は、前述の沈教師以外は『東亜同文書院大学史』²⁴にも掲載されておらず、おそらくは非常勤の清国語担当の教師であったかと思われる。

4月19日(土)は、前述した書院校舎の家主である経元善が午前8時には来訪し、院長と談じており、次いで商船会社からの来訪もあった。新院長の赴任に反響があったといえる。

この日はこの後10時半から竜華寺への参拝が山田純三郎たちと行われた。この寺へはその後の書院生が毎春の行事として遠足に出かけた書院近くの手ごろな楽しみの場所であった。この時の記録によれば、

「寺は書院の西南1里半にあり、1条の大道通じ、路傍桃樹多し。ただ途次の不潔なると乞食の蝟集とに苦む。寺に7層塔あり、曾って故楠陰先生(土佐藩出の名医一筆者)が名を題せられたる所なり。塾主塔に上がりて故人追懐に情を慰するに意ありしも、はいること許されずして空しく帰らる。」(原文はカタカナ)とある。

当時の雰囲気伝わってくる。なお、今日では市民の観光地にもなっている。帰院後、書院前史の日清貿易研究所育ちの井手三郎と白岩龍平が来訪。どのような会談をした

かは記録されていない。当初、病気で寝込んでいた菊池教頭は病気が回復したとする。

翌4月20日も上海滞在日。朝から赤城艦長毛利一兵衛をはじめ多くの塾友らも来訪。午後4時から居留地へ出向きホテルのアストラハウスに田中常德塾友を訪ねたが不在であった。しかし、書院校舎からは遠くにある租界地の中心部を体験できたことであろう。

そして午後6時から、その近くのイギリス租界の繁華街である四馬路の杏花楼で催された前述井手三郎主催の饗宴に書院職員らとともに招かれ、懇親を深めている。なお、新院長は日本から持参した堀井翁作の短刀を経元善に贈るべく菊池副校長に託している。

こうして翌日には午前中、書院の授業を参観した後、奥地の漢口へ航路旅立っている。前半部分の上海、書院の訪問は終了した。

この時の杉浦新院長の記録は、『東亜同文書院大学史』では、「4月、根津・杉浦院長交代 同文会の事業多端のため根津院長辞任し、杉浦重剛新院長に就任。」²⁵と簡素な記事である。

② 上海出航 漢口へ

4月21日午後6時半、杉浦院長と関係者は商船会社大利丸に乗船し、漢口へ向かった。書院から埠頭へは道に迷い、言葉も通じず大変だったという。根津院長が前年に最初の書院生を連れてくるときも、道がわからず、なかなか書院へたどり着けなかったというから、逆に埠頭まででかけるのも大変なことであったと思われる。それほど校舎の位置は上海の町から離れていたのではあ

る。

そしてその深夜 2 時に出航した。書院の中村、高瀬兩名、井手三郎、新聞記者など 7 人が見送った。出向前、大冶鉱山関係者に出向の打電をしている。

4 月 23 日には長江沿いのいくつかの開港場や乗船場を経て、午前 4 時に南京を出港した後、蕪湖に到着。そこで無数の乞食などが小舟にも乗って集まり長竿の先に袋をつけて金銭や物乞いをする姿に「奇なり」と記している²⁶。

翌 24 日、安慶、そして九江を過ぎたあたり、川岸の上に数個の焚火の炎が天を焦がすほど大きくなると、爆竹の音とともに万歳の声が聞こえた。これは西沢、加藤の両塾友の仕掛けで、塾主歓迎の合図であったことがわかった。塾主を思う現地の塾友による大演出で、塾主と塾友を結ぶ強い絆がうかがわれた。そのあとの黄石港で、この西沢ほか田中、栗林の 3 人が乗船してきて、塾主を迎え、同乗して漢口へ向かった。

③ 漢口と大冶鉱山

そしていよいよもう一つの訪問地漢口には、25 日の午前 6 時半に到着した。すぐに領事館書記生古谷栄一と通訳片山敏彦の兩名が迎えに来て、明日の張総督との会見の設定のほか、前述の短刀一口の土産や近衛公及び長岡子からの紹介状を片山通訳に託した。片山はすぐ了解し、折からの雨の中を漢口の対岸の武昌へ渡り、汪執事にあって異例の了解を取りつけている。午後 3 時には山崎桂右漢口領事も院長に挨拶に来ている。この日の一行は船中泊となり、院長は船中からの詩を詠んでいる。

4 月 26 日 (土)、この日から月末まで漢口

一帯と大冶鉱山関係の訪問視察を行っている。まず、26 日は午前 8 時に領事館へ出かけている。随行員は 5 人の塾友。汽船で武昌へ。院長は長森、片山ら大蔵省官房や通訳官らと馬車で総督府へ。11 時半、院長は長森藤吉郎とともに張総督と会見。通訳は片山通訳官総督が担当した。総督は院長の訪問を大変喜んでいたという。当日は院長の日本の服装を見て、清高古雅だと評した。それ以上の記録はない。会見終了後は、大原武慶陸軍大尉宅で午餐を饗せられた。院長を含め 5 人が臨んだ。そして午後は大尉が管理しているという生徒 100 名ほどの士官学校のような将弁学堂を参観し、院長はそこで生徒に講話をしているが、話の内容は記されていない。さらに午後 3 時には鑄方中佐宅へ寄り、漢口行きを待った。そして 5 時半、武昌を端船で出発したが、風波は高く、院長が大利丸へ転乗するときは危なかったと記している²⁷。こうして午後 10 時、漢口を出発した。随行する一行は、西沢、石渡、田慶、張経祖大冶電報主任と記録者の 5 人であった。

翌 27 日の朝 4 時、黄石港着。加藤直三が船を回し、大冶に到着した。大冶鉱務局は護衛を 2 人だし、院長を港へ出迎えた。この夜 8 時は張経祖大冶電報主任から晚餐の招待を受けた。彼は西沢の教育を受けており、漢陽在であったが、院長の世話をしたいと大冶に出てきて、院長を招いたのだという。後、宗方小太郎と岡幸七郎も来訪している。

28 日には、午後 2 時、雨の中、解茂承鉄山総弁を訪問、宗方、岡も含め 7 人が随行した。総弁との通訳は宗方が担当し、解はもっぱら筆談を好んだ。総弁は院長一献の来

訪を喜んで饗応の準備までしてくれたが、院長は多忙で、謝して会談 1 時間でそれを辞している。宿舎へ帰ると、製鉄所所員が調理した日本料理のもてなしを受けている。途中、清国大冶鋳務局医院の呂徳鉄と呂循勉など兄弟 3 人が来訪してきている。大冶鋳山と日本とのつながりが見えそうである。

4 月 19 日は長江下流の丘の上にある田宮春作塾友の墓参をし、歌を詠んでいる。この時は称好塾の塾長としての塾友を思う気持ちがあふれている。この日、張経祖大冶電報局長がまた来訪している。また皇孫殿下の御誕辰にあたり、一同で杯を挙げて遥拝している。塾長らしいところである。その帰路、山で蕨を積み、上海への船長用に、山で蕨を摘んでいる。これも塾長らしいところである。

午後 4 時に、西沢の支那語教師の近家常瑞芝も来訪。一方、宗方、岡、張の 3 人はお別れに来訪している。こうして夜 9 時、端船で黄石港へ廻り、6 時間待ち合わせで、夜中に出向する大享丸を待った。ここでも西沢、田慶、加藤、橋本の塾友たちが見送りに来た。漢口や大冶とのお別れである。

4 月 30 日。午前 3 時大享丸へ乗船。製鉄所関係者ともお別れとなった。

こうして上海から漢口、そして大冶鋳山をめぐる前半の清国の旅は終了した。図 2 はその行程図をややマクロに示したものである。訪問地ははっきり示して、訪問順に上海、漢口、大冶であり、図中には各訪問先と訪問者数を近接させながら示した。まず、最初の訪問地上海では初上陸地であり、漢口行きもすぐに控えていたため、訪問地も少ない。日本国内とは違い塾友も少ないため、訪問者も多くない。また最初の訪問地で

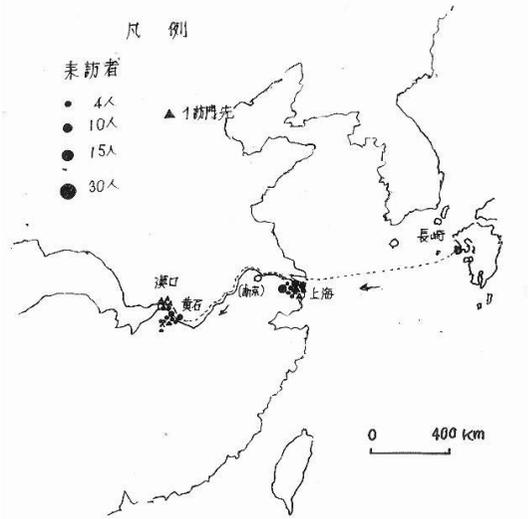


図 2 杉浦重剛の長崎から、上海、漢口、黄石までのコースと訪問先別来訪者数の分布（日記より作成）

あり、院長になる直前の塾長の訪問情報もあまり広がっていなかったといえる。書院も産声を上げたばかりであり、広く認知されておらず、もっぱら杉浦重剛の称好塾の清国内の塾友たちが塾長を敬いつつ表面に出ていたといえる。それは漢口と大冶鋳山でも同様であった。短い滞在期間の中で、最小限の訪問先を塾友などの支えも得て、交通機関の乏しい中で、要領よく巡ったといえる。漢口で張総督とは取り巻きの支援もあってスムーズの会見できたとはいえ、長江上の船からの転船などは杉浦重剛にとっては自力だけの命がけの行動だったに違いない。大冶鋳山とは日本が何とかつなげていきたいという国家レベルの使命感もあったのであろうと思われる。一仕事の後、杉浦が必ず疲れたことは、それらの使命感を国内ではなく、言葉も不自由な清国で達成できたというエネルギーの発揮の揺り返しの表れだったと思われる。若くしてイギリス留学を経験したことも、このような体験を乗り越えられたといえるかもしれない。

④ 再びの上海・東亜同文書院

かくして5月2日、午前11時半、上海へ到着。菊池教頭と山田純三郎の出迎えを受けている。同行してきた中島、石渡、岩崎の3人の塾友とも別れた。

午後1時半、同文書院へ帰着。早速稲村新六大尉来訪があり、次にこの4月30日に2期生を東京から連れてきた根津一前院長や成田与作、そして校医らと面会している。塾主はこの日も気分がすぐれなかったが、夕方より回復した。

翌、5月3日には、新旧院長の送迎会が書院職員の発議で旧教頭室において開催された。というのは、来る5日に前任の根津院長がここ上海へ来たばかりでなく、さらに漢口と南京へ出張することがわかったからである。霞山会の新幹事長になった旧根津院長にとっては、この訪清時にこれまでの院長交代や霞山会新幹事長としての色々な挨拶回りや打ち合わせが詰まっていたのであろう。この時期、根津新幹事長の意気込みが伝わってくるようである。新院長は新幹事長がまず南京へ出かけるということで、劉坤一総督あての近衛公及び長岡子爵からの手紙と日本刀一口を託している。なお送迎会には井手三郎とチベットから帰ってきた成田安暉らも出席している。そして翌5月4日には、第1回の書院学友会の新旧院長の送迎会が開かれ、杉浦新院長は挨拶をし、根津究院長及び菊池教頭も書院生たちに挨拶をしている²⁸。この日、長森藤吉郎ら9人の来訪者もあった。なお、東亜同文書院学友会が設立され、その第一回がこの新旧院長の送迎会であったことが知られる。まだ1年目が終わったばかりの新2期生と到着したばかりの1期生だけの会であった。

こうして5月5日の朝、新旧院長事務の引き継ぎが行われ、杉浦重剛はここに事実上の東亜同文書院2代目院長に就任した。新院長は、漢口にいる宗方小太郎に、遠からず再会を期したいが、今から長江をまたたどる、というような別れの詩を送っている²⁹。新院長は漢口などで通訳も含め、大変お世話になった宗方の人物評価が高かったのであろう。この日は日本人3人を含む6人の来訪者がいた。そして午後1時、新旧院長送別会の記念写真を撮っている。そのあと午後8時、根津院長は南京、漢口へ出発している。

5月6日、いよいよ新院長は上海での活動を開始したが、9時に訪ねた領事館には小田切総領事が留守で、ホテルのアストルハウスでも不在で会えず、近くの書店で支那に関する英書を購入し、書院へ寄付している³⁰。帰校後、夜7時には新旧学生の寮を参観している。その新入寮生のなかに、福岡県出身で塾友の故垂井辰次郎の実弟である真藤駿士がいるのを知って、書院とのつながりを感じたことであろう。

5月7日は、急に気温が上昇し、院長は一日外出せず、何人かに詩を送っている。休養日となった。

そして翌8日、菊池教頭と新校舎の増設地と新入学生の授業などを参観しているが、感想の記録はない。四川人の日本で政治学を学びたいという知県の任が来訪し、また日本へ帰国する石渡がわかれの挨拶に来訪。院長は、根津と片山、小宮山に詩を送っている。依然として来訪者は途絶えない1日であった。

5月9日、井手三郎と南京師範学堂総弁の俞明震が来訪。すでに井手三郎とはかな

り懇意になっていると思われるが、どんな挨拶が交わされたかは記録されていない。その場に臨席できなかったからであろう。午後、書院の道場を視察。書院近くの地名にもなっている高昌廟を参拝。校舎外にも関心が広がってきたように見える。それは翌10日にも夜の晩餐会出席も兼ねて、その前に上海市街へ菊池教頭と出かけていることにも表れている。この時は、上海江左書林という書店へ寄り、支那の書籍を購入し、書院へ寄付している³¹。寄付はこれで2度目だが、開設されたばかりの書院にはまだ支那の書籍が貧弱だと思われたからだと思われる。そのころの南京路や四馬路、そして書店の様子も残念ながら記されていない。そしてこの後四馬路の西洋料理店、一品香で書院職員一同と晩餐会が開かれている。いわば新院長歓迎会ということであろう。ほかに井手三郎、渡辺正雄（大東汽船）、牛島吉郎、篠崎都香佐（前嘱託医）らも参加している。こうして杉浦院長は書院の一員として認められたといえる。

翌11日には、書院近郊の散歩にも出かけている。沼沢地の農漁村風景を見て、出身地の琵琶湖を思い出したであろうか。しかし、記録者の記録はない。この日、昨日来訪した渡辺正雄を含む塾友と思われる4人が来訪している。

5月12日には、さらに遠出をしている。朝から菊池教頭と共に家主の経元善を訪問したからである。経は贈られた日本刀に銘を入れ、「満悦の意を」表したという。それ以上の記録はない。午後からは徐家滙の「南洋公学」を参観した。ところで、東亜同文書院は、その後、革命運動の戦火によるこの高昌廟校舎の消失やそのあと移転したハスケ

ル路での狭隘な校舎を脱して、1917年にこの徐家滙に移動、フランス風の南洋公学（上海交通大学となる）に並立するように瀟灑な新校舎を自前で建設した。そのためにこの時期の3代目となった根津院長の卒業生をめぐる東奔西走の建設費捻出の金策は大変であった。しかし、この「南洋公学」参観時はまだそのような歴史を刻むことになるとはだれも思いついていかなかった。記録者はその時の南洋公学次のように記している。

「公学は書院の西方約2里にあり、宏荘の建築にして、周囲開豁、風景の美のみならず。市街に遠かり、恰も東京における青山付近に似て、校舎の設置に好適の地たり。聞く、この校舎は5年前、両江総督及盛宣懐の設立するところにして建設費18万金を要せしという。目下欧米人および清国の教師にて生徒300名を教育す。課程はわが学習院のごとく、小学、中学、専門の3科に分る。専門は鉄路科之なり」³²。

午後4時帰院。夕食後、院長は散歩もし、近くの植木屋で盆栽数種類を購入して、これも書院に寄付した。自然体の中で過ごすとする院長としては、書院にそのような余裕がない雰囲気のカバーしようとしたのであろう。しかし、疲れを感じた院長は、この夜、篠崎旧校医からの招待を断っている。

5月13日、やっと小田切領事が来訪。しかし、院長との会話は記録されていない。

5月14日。午後、袁上海道台を曾根原事務員と訪問し、洋務局で会見。その後、日置外務書記官が一人の来訪、そのあと、新院長

は西田舎監を通じて学生一同に詩を示してほしいと依頼している。

5月15日。この日はまた曾根原事務員を伴い、鉄道総局に出向き、盛宣懐に会い、日本刀一口を贈っている。盛は前年の東亜同文書院の開学式にも出席しており、3日前の「南洋公学」の参観で見た盛の建設したその校舎の壮観さに対して敬意を抱いており、それを建設した有力な人材として評価したに違いない。院長は盛の力量に大いに共感するところがあったのだろう。日本刀を贈るだけの相手であったといえる。なお、領事館にも立ち寄ったが、領事からの晩餐会を断っている。これまでの領事の行動から見て、また盛にあった後では、その気にならなかったのであろう。この日は正金銀行の塾友を訪問し、記者など5人の来訪者を迎えている。

翌日、経元善のおそらく日本刀のお礼の訪問を受け、午前是他2人、午後は高塚守備隊副官の訪問を受けている。また、帰国が迫った院長に、珍しく漢口の片山俊彦塾友から送信されてきた詩に、韻を踏んだ詩で答えている。

そして午後、帰国を前にして、院長自ら書院学生一堂に次のような訓戒を述べている。

「要は国費を以て外国に留学する者の責任の大なるはもちろん、その一挙一同は、延べて国体に関するを以て、幾微も慎重を守るべく、且各自責任を、重んじ、交情を緊密にし、以て団結を鞏固ならしむべしというなり」³³と。

この訓戒の内容は、その後の各院長の訓話として、言動、行動、服装などを日本人と

して国際都市の中で留意するようにと継承され、また寮生活の中で書院生は相互に強い絆の交情で結ばれていった。

こうして、この後、午後5時、病気であった根岸侘教授を見舞い、また病期治療中の書院学生も見舞う親心を示した院長は、書院職員の送別会に臨み、さらにそのあと、菊池副校長と書院を出発すると、滬報新聞社、領事館を訪ね、郵船会社の上海埠頭から博愛丸に乗船した。見送る人は書院職員たち、書院学生のうち室長28名、および小田切領事、日置外務書記官、郵船の林と水川、商船の堀、三井の中山、そして井手、篠原、牛島、篠崎、立花、岩崎、近藤の各面々が揃った。また乗船した上田春治塾友は本船中できめ細かく準備し、喫煙部屋の確保から祝杯まで斡旋役をこなした。その送別の「光景は頗る壮」³⁴であったと記されている。

⑤ 上海からの帰国

5月17日はいよいよ朝7時上海を出航。帰国する一人の塾友も同乗、3人の塾友が朝から埠頭まで出かけてきてくれ、見送ってくれた。そして午後1時には海の色が黄色から碧色に変わり、海洋は平穏であったと記録は続く。

ところで、この漢口と大冶から戻った後の上海での院長一行の行動は、最初の上陸時とは大きく異なっている。図3はそれを示している。この図は帰路の上海だけをマクロ的に示したため、詳細を示せてないが、訪問先と来訪者の数は格段に増えている。上陸時よりは滞在時間が長いこともあるが、最大の要因は、書院の前院長根津一からの引き継ぎも含め、杉浦重剛がまぎれもなく書院の新院長になったということである。

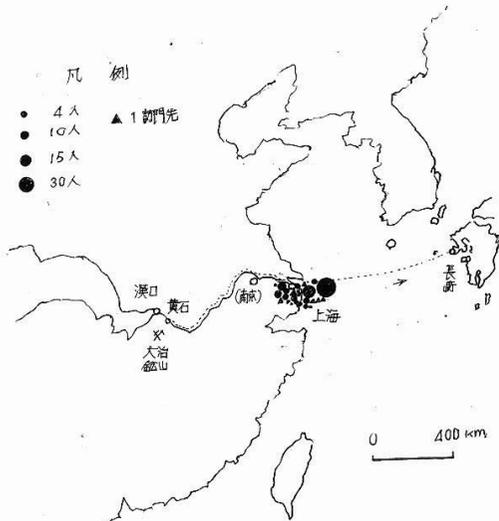


図3 杉浦重剛の黄石から上海、そして長崎までのコースと訪問地別来訪者数の分布 (日記より作成)

関係者や周囲もそれを認識し、杉浦重剛を書院の院長として対応するようになったからである。常に書院関係者が新院長の世話をし、金融機関や官庁、報道機関、また清国側の各組織も書院の新院長に敬意を表して訪問するようになった変化である。そして新院長自身もその意識をもち、書院内だけでなく、校舎の周辺や上海の租界地の町にも関心を持ち始めたことがあった。帰国を控えた最後には、上陸時にはほとんどつながりなかった東亜同文書院の学生たちともつながり始めたこともあった。書院院長としての意識と行動があらわれ、町の書店で求めた本やいくつかの盆栽を書院へ寄贈したりしている。院長として発した書院学生への言葉も受け入れられたことであろう。そのような2度目に戻ってきた上海で、せめてもう1か月でも滞在すれば、称好塾の塾主としての塾友たちとの絆の経験を生かした教育の芽が生まれ、書院や書院生に影響を与え、それなりに新しい風を吹き込んだかもしれない。そのように考えると、ひょ

っとして近衛が杉浦重剛へ書院の新院長を任せた期待は、そのあたりにあったのかもしれない。

6. 新院長の帰国コース

上海を出港し、5月18日に長崎へ帰港したあとの新院長の軌跡を補足的に記しておく。図4はその後の長崎から新橋までのコースを示した。帰路はすべて鉄道の旅であった。5月18日の長崎到着時には早速塾友2人が出迎え、翌朝には塾友4人と長崎新報記者が来訪。昼前長崎駅発で佐賀、二日市そして博多へ到着するごとに各駅で塾友が出迎えている。宿泊した博多では宮崎神社の禰宜を含め6人が来訪、翌日の門司までの同乗者もいて、馬関から西条、尾道、岡山、神戸と停車駅ごとに塾友が出迎え、大阪では京都からも駆け付けた塾友数十人の塾友が出迎え、翌朝にも6人が出迎えた。5月22日には大津経由で故郷の馬場で塾友宅に宿泊し、同宿者3人も含め7人が出迎えた。

最終日の5月23日は、馬場で多くの見送りを受け、八幡、彦根、名古屋、沼津、平沼でもそれぞれ数人の見送りを受け、午後10時半無事に新橋へ到着。100余名の人が出迎えたと記録されている³⁵。

所で、帰国時の各駅での出迎え者のほとんどは、杉浦重剛を塾主とする塾友たちであり、杉浦と塾友をつなぐ太い絆が改めて浮き彫りになった。上海で東亜同文書院の新院長になり、その自覚を得つつあった杉浦重剛ではあったが、国内の帰路では完全に称好塾の塾主としての立場になっていたといえる。

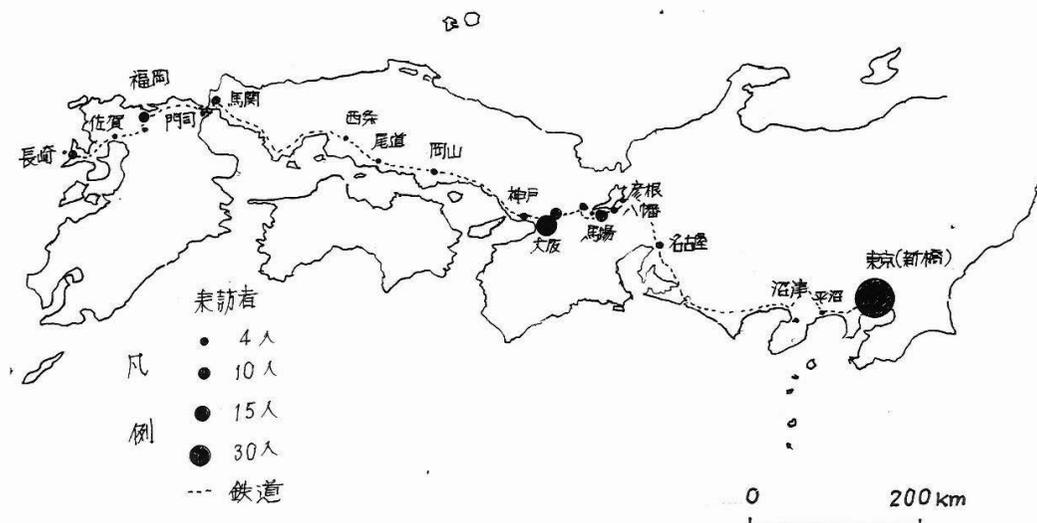


図4 杉浦重剛の長崎から東京への帰路コースと訪問地別来訪者数の分布
(日記より作成)

7. おわりに

以上、本稿は、東亜同文書院の第2代目院長となった杉浦重剛の上海、東亜同文書院への訪問旅を明らかにした。第3者の記録であり、ある意味でより客観的な日誌記録からその実態を明らかにできたといえる。従来の杉浦重剛が病弱のため、院長になっても清国、それゆえ上海の東亜同文書院へは行けなかったのではないかという風評を覆したといえる。確かに丈夫な身体ではなかったが、近衛の懇請を受け、それを実現するためにわが身を削って清国、東亜同文書院へ、しかもさらに奥地の漢口や大冶鉱山まで足を伸ばし、張総督とまで会見するなど、新院長を意識した旅であった。すでに国内の旅の道中から、自らが塾主を務めるその塾生の塾友たちにより、いたるところで送別され、清国に入っても同様であった。まだ2期生を迎えたばかりの書院生は、道中で新院長を迎えたり、世話をしたりすることはできなかった。旅は過激でもあった。旅の途中でしばしば休養し、せつかくの晚餐

会も時に辞したりしていたのは、その表れであろう。本人は出発に先立ち死も覚悟したといっている。それほど、杉浦重剛にとって懇請された近衛の存在が大きかった。と同時に、教育史、教育学のプロとして、清国では新しい教育を扱えるのではないかという期待と好奇心もあった、とみずからも述べていることも本人を揺り動かしていたのであろう。

こうして短い期間の訪問であって、しかも肝心の書院は杉浦の到着時には、開学した1年前に入学した1期生だけで、到着した直後に第1代目の根津院長が新2期生を東京から連れてきたばかりであり、まだ出来たばかりで、未完成の書院であった。したがって記録にもあるように書院の学生たちとの接点はわずかであった。

では、その少ない接点にあった書院生たちは杉浦重剛新院長をどう見たのであろうか。『東亜同文書院大学史』には各期の雰囲気は述べられている³⁶。

それによると、杉浦重剛院長が着任した

ばかりの時に入学となった第2期生は、「教授陣強化さる」の項目の中で、「院長は杉浦重剛先生であったが、上海に常住せず、翌36年5月、根津先生が同文会幹事長のまま院長に就任された」と事実を簡単に記しているだけである³⁷。後述するように、この4月には杉浦重剛は病期のため、書院院長を辞しており、新書院生は新院長と十分に接する機会はなかったためである。そして杉浦重剛院長が到着したときに2年目を迎えたばかりであった第1期生は、「教授陣と学生気質」の項目の最初に、「開講した翌年の5月、杉浦重剛先生が根津先生の後を受けて院長となられた。杉浦先生は翌36年、長江を遡って南京に赴かれ、劉坤一総督と会い、さらに漢口では張之洞総督と懇談するなど、中国の風物を見学されて帰院、間もなく院長を辞して帰国された。代わって根津先生がふたたび院長となられた」とある³⁸。

本論の日記に照らすとこの部分の記述には若干の齟齬があるが、2期生よりは説明的だが、その齟齬も院長との接点が少なかったためであろう。

いずれにせよ、杉浦重剛の院長の存在は極めて短かったため、とくに2期生には、新院長の顔を少し見ただけの存在であり、両期生にとっては院長との心のふれあいまでは至らなかったといえる。称好塾のようなわけにはいかなかったのである。

ところで、杉浦重剛は、5月23日に帰国したが、同年7月には持病であった神経衰弱症を発症し、病床生活が続き、翌明治36年、前述のように、東亜同文書院院長を辞している(49歳)。清国への旅が影響したであろうことは、旅日記からうかがわれる。そこで院長は再び根津一が3代目院長となり、

その後の書院の骨格を作った。それは杉浦スクールともいえた称好塾や日本中学校にみられた日本主義的スクールの方向とは異なり、儒教倫理に基づき、荒尾精の構想に基づいたビジネススクールとしての根津スクールを確立していく方向であった。それは外地の国際都市上海にあって、より実践的な国際的視野を教育しようとした点では世界的にも新鮮で稀有な存在になっていくことになった。その点で杉浦重剛の辞任と根津一の再任による交代は、その後の東亜同文書院の性格を形成していくうえでの大きな分岐点になったといえる。

最後に、参考にした塾友2人がバトンタッチして記録した日誌は大変貴重であるが、来訪者たちと杉浦重剛との会談の具体的内容は多くが欠けている。総督との会談や大冶鉱山でのやり取り、塾友たちとの会話、その他などで、これらが記されているともっと活写されて深みが増すだろう。あくまで記録者であり、通訳者の記録ではないので、会談時に臨席することはできず、その内容が書けなかったということであろう。その点に読み手として心残りがある。

また、杉浦重剛も自らこの件についてはあまり記していない。短時間の訪問だったため、事象をどう見るかという点までは至らなかったであろう。ただ、そんな中で塾友との間の談話の中で、渡清第1の所感として語られたことが日誌の最後に付記されているので、それを紹介する。

「清国におけるわが在留民の家屋を速やかに日本風に改築し、わが内地同様の起居生活をなさしめざるべからず。欧米人の着々事業を成功するは、全く

故国にあると異ならざる生活を有すればなり。現今わが居留民の状態たる、支那化するにあらずば、欧州化するより他に途なく、毫も生来慣習の娯楽を享有せざるより、常に一時的旅人の感をなして、永遠の事業を営むの念に乏しく、動もすれば帰志に制せらるるをいたす。男子といえども免れず、いわんや婦人をや。聞く西洋家屋もまた清国人これを建築して貸与するなりと。しかして日本人の日本家屋を所望するなきは、何らかの遠慮に出しものか。従来渡清者のこれに関する意見を聞かざるも不思議なりと。」³⁹。

このような話をどこで杉浦重剛が聞き出したかは、日誌の中からは不明だが、日本人が旅人のように落ち着かない立場で清国（上海）に来ていることを、日本人が居住している家屋から読み取り、欧米人に見習うべきだという意見を開陳している。この時期、欧米人の方が半世紀も早くから入り込み、日本人は新参者という負い目もあった状況を、現地での日本人の住み方のハード面から指摘したものであろう。化学もイギリスで学んだ杉浦重剛に理系的な論理性がうかがわれ、もっと色々多事象を観察、考究してほしかったと思われる。

<注>

- 1 大町桂月、猪狩史山共著（1924）『杉浦重剛先生』、政教社 345。
- 2 前掲① 347。
- 3 前掲① 347。
- 4 前掲① 347。
- 5 前掲① 344。
- 6 前掲① 344。
- 7 日本中学校（1937）『日本中学校五十年史』、日本中学校刊。236P。
- 8 前掲① 348。
- 9 前掲① 第1~15章。
- 10 いずれも、杉浦重剛全集刊行会（1982）『杉浦重剛全集 第3巻、教育史、理化学』、同全集刊行会所収。381~942。
- 11 前掲⑦ 88~93。
- 12 前掲① 348。
- 13 杉浦重剛訳（1887）『教育原論沿革史』、金港堂出版。杉浦重剛全集刊行会（1982）『杉浦重剛全集、第3巻、教育史、理化学』、同全集刊行会刊、所収。
- 14 杉浦重剛訳（1887）『教育全史』、全2巻、教育書専門所普及所出版刊行。杉浦重剛全集刊行会（1982）『杉浦重剛全集、第3巻、教育史、理化学』、同全集刊行会刊、所収。
- 15 前掲① 549。
- 16 前掲① 551。
- 17 北村和三郎、岩田清三郎『塾主渡清日誌』、杉浦重剛全集刊行会（1983）『杉浦重剛全集、第六巻』、同全集刊行会刊、所収。
- 18 前掲⑦ 88。
- 19 前掲⑦ 90。
- 20 前掲⑦ 96。
- 21 前掲⑦ 96。
- 22 前掲⑦ 96。
- 23 前掲⑦ 96。
- 24 大学史編纂委員会（1982）『東亜同文書院大学史＝創立80周年記念誌－』、社団法人滬友会刊、

103~104。

- 25 前掲⑭ 98。
- 26 前掲⑰ 98。
- 27 前掲⑰ 99。
- 28 前掲⑰ 102。
- 29 前掲⑰ 102。
- 30 前掲⑰ 103。
- 31 前掲⑰ 104。
- 32 前掲⑰ 104~105。
- 33 前掲⑰ 106。
- 34 前掲⑰ 106。
- 35 前掲⑭ 398。
- 36 前掲⑭ 403。
- 37 前掲⑭ 398~399。
- 38 前掲⑭ 398。
- 39 前掲⑰ 109。

【付記】

本稿をまとめるにあたり、2018~2020年度の文部科学省科学研究費（基盤研究C）の一部を使用した。国会図書館などの閲覧も含め、学内外の関係機関には謝意を表したい。